

いのちって何？

(原文は英語)

ネティミ・イシャーラ・フェルナンド (18 歳)

スリランカ

命とは、自らの存在であり、自らの体験であり、生きようとする自らの意思である。私の両親がよく口にする古き良き時代には、生きることは歓迎すべきことであり素晴らしいことだった。しかし、2021 年の今日、生きることは辛く苦しい。今にも命が消えてしまいそうだ。技術は進歩し、私たちは努力を重ね、あらゆることをしてきたにも関わらず、生きることは楽になっていない。危険と紙一重だ。

私たち人間は、授かった命を当たり前のごとく捉えて生きてきた。そして今、私たちはその報いを受けている。しかし、特定の何か一つにその全責任を負わせることはできない。なぜなら、木々を切り倒し、水を汚染し、海亀を殺し、産業活動で放出された有毒ガスによって地球温暖化を招いたのは、私たち人間だからだ。私がこの作文を書き、意識改革を訴える最中も、生命は生存を賭けて闘っている。

私たちは、限界まで生命から搾取し続けてきた。今、そのツケが回ってきたのだ。高等生物として食物連鎖の頂点に立つ私たちは、自分たちを無敵の存在だと考えてきた。だが、かろうじて生きている微細な細胞のかけらが、まさに私たちの目の前で数多くの命を奪っている。私たちは、あらゆるものを犠牲にしてテクノロジーを発展させてきたが、肝心の今になって何の役にも立たない。警戒状態の生活が始まって 2 年になるが、こうした状況はもはや非日常ではなく、日常の一部となってしまった。こんなことであってはならない。タダで命を授かったからといって、それを当たり前のことと思っはいけないのだ。

命とは何か。私にとってそれは、この地球だ。私たちのふるさとであり、私たちが暮らす星であり、私たちの責任で守っていかなければならないものだ。もし地球が存在しなければ、生命は存在しないだろう。その地球が今、私たち人間の行動が招いた恐ろしい事態によって苦しめられている。しかし、すでに手遅れということはない。しっかりと声を上げさえすれば、私たちの生命はまだ救うことができる。人々の意識を向上させ、行動を起こさなければならない。なぜなら、私たちが率先して行動しない限り、変化は起こらないからだ。さあ、手袋を持ってビーチの清掃をしよう。リデュース・リユース・リサイクルを実行しよう。使い捨てプラスチックを生分解性のある素材に置き換え、私たちの生命であるこの地球を存続させよう。温室効果ガス排出量を削減し、化石燃料の使用を止めよう。持続可能な未来に投資し、知識を深め、水素燃料車やバイオディーゼル、よりスマートなテクノロジーの開発に取り組もう。太陽光、風力、水力を利用しよう。こうした永続的に再利用可能な資源を当たり前のもと思わず、汚染することなく活用していこう。私たちには選択肢がある。しかし、こうしたことに進ん

で投資し、知識を深めようとする人がいない。このままでは、ふるさとと呼べる場所が、私たちの生命が失われる可能性がある。移り住み、次に荒らす別の星を調査することよりも、今現在私たちが住んでいる星を救うことのほうに多額の資金を費やそうではないか。勝算がないと決まったわけではないのだ。北極や南極のシロクマやペンギン、そして、その地域の海面上昇に関心がない人たちは、せめて自分自身のことや自分の子どもの未来について考えてみよう。5～10年後には、自分自身や自分の子どもの生命が失われているかもしれない。生活するだけで精一杯な人たちに、火星に移り住むという選択肢はないことは、誰もがわかっていることだ。私たちが声を上げない限り、生命はやがて終わりを迎え、地球も死に絶える。

こうした言葉から伝わる私の声は小さいだろう。しかし、700語以内に制限されたこの作文が、ページの枠を越えて、何かしらの影響を及ぼすことを私は期待している。グreta・トゥーンベリが声を上げ、巨大な意識改革の波を起こすことができるのなら、私たちも同じように立ち上がり、抗議するだけでなく、実際に変化を起こすこともできるはずだ。命は大切だ。だからこそ地球が大切なのだ。生命を生かすためには、持続可能な未来が必要だ。私たちが今営んでいる生命に感謝し、それを守ってほしい。生命は救う価値のあるものだ。今こそ行動しよう。地球は、私たちの命なのだから。